

2013年1月25日
フランス語フランス文学専門分野
博士課程 高山典子

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
平成24年夏学期個人派遣

帰国報告

1. 研究課題名

サミュエル・ベケットの戯曲研究——詩的聴取としての上演

2. 派遣先での活動

- (1) 派遣先 フランス国立図書館、フランス国立視聴覚研究所の視聴覚資料室
- (2) 派遣期間 2012年10月29日-2013年1月20日

3. 主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

サミュエル・ベケット(1906-1989)の戯曲『クラブの最後のテープ』(*La Dernière Bande*, 1958)を取り上げ、作者による上演上の指示と改変を、書誌的な研究の枠組みにとどまらず文学批評の観点から研究し、上演を通して実現される詩的な聴取について考察を行う。作者の作品観を明らかにする試みの一環である。具体的には、ベケット自ら作品について注釈を施した演出ノートとその研究を手がかりに、芝居の映像とおよびベケットについての作家と演劇人の証言を視聴する予定。

(2) 実際に達成された成果

この派遣を通じ、学位論文の第2部を構成する、ベケットの演劇作品における空間と時間についての考察を、演出に関する記録と映像資料を用いて行った。具体的には、『クラブの最後のテープ』に作者が施した執筆後の改変と演出上の要求を研究した。特に、人物が(自分の)声を聴く行為に着眼し、作者の詩法の一つとして論じた。

①聴取の目的の弁別 演出ノートに記された、人物がテープを聞くシーケンスと聞いていないシーケンスとの等価性、および人物とテープレコーダとの特別な関係から、録音音声と現実舞台との対話が作者によって重視されていることに着眼した。複製可能なテープの音声に作品としての固有の意味を与えるのは、この対話(録音音声の聴取)であると考えた。

②視点の変化 演出ノートには観客の視点を意識した改変が盛り込まれている。特に、冒頭の簡略化と、舞台奥のホールの設置(クラブのための白黒のコントラストから、観客のための白黒基調舞台に改変されている)は顕著である。裏を返せば、書物として刊行された同戯曲は、人物の内奥の視点から構想されていることが分かる。ベケットにおける聴取は、創作の次元で内的な心象緊密であると導ける。

③テキストと舞台空間の一致 出版された戯曲から読み取れる、聞く行為と聞かれる内容との一致は、推測のレベルを出なかったが、上演ノートに記された聴取の姿勢に関する指示から裏付けることができた。上演中の聴取行為は、テキスト空間を舞台空間に読み込むデバイスとして働くことが考察できた。

直接ベケットが演劇作品の意味に言及している演出ノートの参照、およびその具体化された映像の視聴は、論文第2部が目ざす、ベケットにおける場・空間（複数）・対話・時間の演劇的な定義を導く作業に資するところとなった。

（3）今後の研究展望

この研究で導いた『クラブ』における聴取行為の重要性について、今後は①ベケットの他の作品に登場する聴取の種類と合わせて考察していく。②特に、詩法や詩学の定義を明確にしながら論述を展開していくことが必要である。③そのうえで、ベケットの書法を、古代の詩法や修辞と結びつけ、作品という概念の関わりの中で研究したいと思う。19世紀に開花したモダニズム芸術は、伝統的な価値観を転向する試みとして捉えられ、アリストテレスによって提唱された美の規範が、近代の作家や詩人らによって砕かれたと考えられる。その一方で、近現代の文学作品を通じて明らかにされるのは、むしろ、文学の価値や形式の転覆を経験しながらも損なわれることのない本質的な性質である。モダニズム作家の1人であるベケットを研究するうえで、作品という概念に光を当てることに意義があると考えられる。